



Title	古代イスラエル史・モーセ五書・預言書：最近の旧約研究の動向
Author(s)	山我，哲雄
Description	日本基督教学会北海道支部2023年度公開シンポジウム「モーセの律法と預言者の書と詩篇：旧約聖書学の最前線」。2023年8月11日。
Citation	日本基督教学会北海道支部公開シンポジウム記録，6，57-70
Issue Date	2025-07-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95826
Type	conference paper
File Information	jscsh_006_57.pdf



古代イスラエル史・モーセ五書・預言書 —最近の旧約研究の動向—

山我 哲雄

はじめに

最近、旧約研究の動向が流動的なようなので、一般向けに解説してほしいという要請を、日本キリスト教学会北海道支部理事会からいただいた。私事であるが、数年前に古希を迎えたので、旧約研究には半世紀にわたって携わってきたことになる。この間、たしかに旧約研究の在り方は大きく変化し、私が大学で旧約の勉強を始めた頃とは様子がずいぶん変わってしまった。研究が進歩発展したというより、考え方の枠組み（パラダイム）というか、研究の前提となる基本的な理解の多くが覆され、定説不在の混沌状態に陥ってしまったと言えるようなのである。旧約研究の範囲は幅広いので、私としては、専門に近い古代イスラエル史、モーセ五書、預言書の比較的最近の研究動向について解説し、詩編研究については、その分野に造詣の深い山吉智久氏に補っていただくことにしたい。

古代イスラエル史

歴史的・批判的研究という用語に端的に示されているように、古代イスラエル史についての理解は旧約研究にとって基本的な意味を持つ。旧約研究の多くの部分は、旧約聖書の伝承や文書やテキストがどの時代のものかを史的に位置づけ、その時代のいかなる状況や問題を反映しているかを解明するという作業だからである。その際に、私が研究を始めた頃は、旧約聖書は多くの伝説的素材や荒唐無稽な奇跡物語等を含みながらも、歴史の流れ自体についてはほぼ大筋で実際の歴史的経過を反映するということが前提とされていた。

すなわち半遊牧的な族長時代から出エジプトを経てカナン定着に至り、士師時代から統一王国の成立に進み、ダビデ・ソロモンの統一王国時代の繁栄を経過して王国分裂に至り、南北両王国の相次ぐ滅亡からバビロン捕囚および捕囚後（ペルシア時代、ヘレニズム時代）に進むという歴史像である。拙著『聖書時代史 旧約篇』（2003 年）も、そのような傾向を免れていなかった。

しかし、20 世紀末になると、欧米の学界では、そのような従来の古代イスラエル史観の根本的な再検討が行われるようになった。例えば、族長時代や出エジプトについて、どれほど歴史的なことが語り得るかが問題視されるようになった。それらの物語が書かれたのは、実はかなり後の時代（早くとも前 8 世紀以降）であると考えられるようになったからである。イスラエル人のカナンの地（パレスチナ）の「土地取得」については、かつてはそれが本質的に見て、創世記の族長物語に見られるような半遊牧民の平和的な浸透（アルト、ノート¹）であったのか、それともヨシュア記に描かれているような軍事的な征服（オルブライト、ブライト²）であったのかが論争されていた。「土地取得（Landnahme）」などという曖昧な表現が道いられたのも、その「仕方」が問われていたからである。ところが、20 世紀後半になると、これをカナンの地内部の社会変動の結果とする見方が有力になってくる。問題となる時期（前 1200 年頃）に、カナンの一連の都市国家網が様々な理由で崩壊しており、他方でそれに代わるかのように、それまであまり住民のなかった山地に新しい居住地群が急増している。それらの新住民はかつてのカ

¹ A. Alt, *Die Landnahme der Israeliten in Palästina* (1925); ders., *Erwägungen über die Landnahme der Israeliten in Palästina* (1932) . in: ders., *Kleine Schriften zur Geschichte des Volkes Israel I* (1953) . 89-125, 126-175. M. Noth, *Geschichte Israels* (1950). [M・ノート『イスラエル史』樋口進訳、日本基督教団出版局]

² W. F. Albright, *The Israelite Conquest of Canaan in the Light of Archaeology*, *BASOR* 74 (1939), 11-23; J. Bright, *A History of Israel* (1959) . [J・ブライト『イスラエル史』〔新屋徳治訳、聖文舎〕]

ナン都市国家の住民の一部であり、都市国家から離脱して山地で自律的な生活を始めたのである（メンデンホール、ゴットワルト、レムケ、ディーヴァー³）。それらの人々がやがてイスラエル人となった、というのである。

王国時代以前のイスラエルについては、それがある種の「アンフィクチオニー」、すなわち、中心的な聖所を共有する 12 部族の宗教的部族連合をなしていたという仮説（ノート、ブライト⁴）が定説であった。アンフィクチオニーはもともとギリシアによく見られた制度であるが、中央聖所を月ごとに輪番で管理するため、成員ポリスの数が 12 の約数であることが特徴とされる。ところがやはり 20 世紀後半から、一方でイスラエル 12 部族の図式は歴史的でなく後代の人為的なものであり、他方で旧約聖書自体にそのような制度の存在を示す記述がないことや、ギリシアの歴史的現象をイスラエルに移すことに無理があることが批判された⁵。その後、王国時代以前のイスラエルの在り方を説明するために、アンフィクチオニー仮説に変わる様々なモデルが提唱されたが、いまだに学界のコンセンサスを得るには至っていない。

20 世紀期の最後の 10 年から 21 世紀の最初の 10 年にかけて、特に論争の的になったのが、「統一王国」の存在如何である。サムエル記や列王記によれば、ダビデはエルサレムを首都に 12 部族を統合した強大な統一王国を確立し（サム下 2-5 章）、周辺民族もことごとく支配下に置いた（サム下 8 章）。その後継者ソロモンの時代に統一王国は国際交易などを通じて繁栄を享受し、北はユーフラテス

³ G. Mendenhall, *The Hebrew Conquest of Palestine*. BA 25 (1962), 66-87. N. K. Gottwald, *The Tribes of Yahweh. A Sociology of Religion of Liberated Israel, 1250-1050 B. C. E.* (1979); N. P. Lemche, *Early Israel. Anthropological and Historical Studies on the Israelite Society Before the Monarchy*. VTS 37 (1985); W. G. Dever, *Who Were the Early Israelites and Where Did They Come From?* (2003).

⁴ 例えば、注 1 に挙げた Noth, 注 2 に挙げた Bright 等を参照。

⁵ 例えば、注 3 に挙げた Gottwald 等を参照。

川流域から南はエジプトの入り口までを支配下に置いていた（王上 5:1-5）。ところがこの間、考古学が飛躍的に進歩したにも拘わらず、エルサレムにもその他の場所にも、ダビデ・ソロモン時代（前 1000 年前後）にそのような大国が存在したことを裏付けるようなモニュメンタルな建築物跡や軍事施設、文字史料が見当たらず、またそれまでソロモン時代のものでされてきた、メギドやハツオルの大規模な城壁や城門も、100 年ほど後のオムリ・アハブの時代のものであることが明らかになった（フィンケルシュタイン／シルバーマン⁶）。これらのことから、ダビデ、ソロモン時代についての旧約聖書の記述は、少なくとも、相当程度に誇張されているという疑念が生じるようになった。そもそも、ダビデについても、ソロモンについても、その歴史的事実を裏付けるような聖書外史料は当時一つも知られていなかったのである。（ただしダビデについては、ユダ王国を「ダビデの家」と呼ぶアラム語の碑文が 1993 年に発見され、少なくともユダ王国の王朝創始者としてのダビデの歴史性がほぼ認められるようになった。）

統一王国をめぐる論争が 20 世紀末に特に熱を帯びたのは、この時期にヨーロッパやアメリカで、旧約聖書の歴史的記述の信憑性全般について極端に懐疑的な見方をする研究者が輩出したことである（デーヴィス、トンプソン、レムケ⁷）。彼らによれば、旧約聖書の歴史記述のほとんどは、従来考えられてきたよりもずっと遅いペルシア時代からヘレニズム時代（前 6~3 世紀）に書かれたものであり、しかもこの時代のユダヤ教の書記たちが、自分たちの民族的なアイ

⁶ I. Finkelstein/N. A. Silberman, *The Bible Unearthed: Archaeology's New Vision of Ancient Israel and the Origins of the Sacred Texts*. (2001). [I・フィンケルシュタイン／N・A・シルバーマン『発掘された聖書：最新の考古学が明かす聖書の真実』越後谷朗訳、教文館]

⁷ P. R. Davies, *In Search of 'Ancient Israel'*. JSOTS 148 (1992); T. L. Thompson, *Early History of the Israelite People: From the Written and Archaeological Sources*. SHANE 4 (1992); N. P. Lemche, *The Israelite in History and Tradition*. (1998).

デンティティを基礎づけるために創作した「栄光の過去」であって、基本的に虚構（フィクション）と見られるべきものである。ダビデ、ソロモンの歴史的事実性は「アーサー王」のそれと同程度であって、前 10 世紀のエルサレムは大王国の首都などではなく、山の上の村に過ぎなかった。

統一王国が存在しなかったのであれば、当然ながら「王国分裂」もなかったことになる。懐疑派の主張によれば、考古学的所見や聖書外史料による裏付けがない限り、聖書を歴史史料として用いることはできない。イスラエルで最初の「王国」が成立したのは、考古学的遺跡が残り（サマリア!）、アッシリアやモアブの碑文に名指されているオムリやアハブの時代（前 9 世紀）のイスラエル王国（いわゆる北王国）あたりからであり、ユダが「王国」の体をなすに至ったのは、前 8 世紀後半のヒゼキヤの時代になってからであるという。

このような急進的な見方に対しては、当然ながら、伝統的なイスラエル史観を擁護しようとするより穏健な研究者からの反論や批判が加えられた⁸。時には論争が感情的な対立となり、論点が聖書の歴史記述の信憑性に関わるので、互いに「最小限主義者（ミニマリスト）」や「修正主義者（リヴィジヨニスト）」対「最大限主義者（マクシマリスト）」、「原理主義者（ファンダメンタリスト）」とレッテルを貼って罵倒しあうという、あまり学問的とは言えない非難の応酬に発展することさえあった。そのため、この論争は「ミニマリスト」論争とも呼ばれた。論争自体は、痛み分けのような状態で決着のつかないままで終息したが、その後の古代イスラエル史の通史を見ると、福音派の保守的なものを除けば、統一王国の存在を前提としないものが多い（ネルソン、シュミッツ、グレイブ、フレ

⁸ 例えば、W. G. Dever, *What Did the Biblical Writers Know & When Did They Know It?* (2001); K. A. Kitchen, *On the Reliability of the Old Testament* (2003).

フェル、シッパー⁹)。古代イスラエルの歴史について、確実性をもって語り得ることは、大幅に減ってしまっているのである。

モーセ五書

私が旧約研究を始めた頃、モーセ五書については、四資料説がほぼ定説であった。四資料仮説とは、モーセ五書が、もともと独立して成立した四つの異なる資料を編集者が組み合わせて一本化したものだという仮説である。批判的研究以前には、五書はモーセ自身が書いたものと素朴に信じられていた。しかし、18 世紀の中頃になると、ドイツやフランスの何人かの聖書研究者が、創世記冒頭に内容の異なる二つの創造物語（一方は七日間での創造物語、他方はアダムとエバの物語）が併存しており、しかも前者では神について「エロヒーム」という普通名詞が、後者では「ヤハウエ」という固有名詞が用いられていること着目し、五書が複数の資料を組み合わせたものであるという見方を示すようになった。これと同じような神名の違いと文脈の区別は、創世記の族長物語や出エジプトの物語にも観察できた。そこで当初は、五書全体が「ヤハウエ資料」と「エロヒーム資料」の複合体だという想定がなされた。

ところが研究が進むと、創世記で同じ「エロヒーム」を用いる場合でも、思想傾向と用語法を異にする二つの文脈が区別できることが判明した。そして、このうちの 하나가、時代によって神名を「エロヒーム」、「エル・シャッドアイ（全能の神）」、「ヤハウエ」と使い分けており、しかも犠牲祭儀など顕著に祭司的関心を示すことが分かった。そこでこの文脈は、祭司（Priester）が書いたものとして

⁹ R. D. Nelson, *Historical Roots of the Old Testament*. (1200-63 BCE) (2014) ; B. Schmitz, *Geschichte Israels*. 2. Auflage (2015); L. L. Grabbe, *Ancient Israel: What Do We Know and How Do We Know It ? Revised Edition* (2017) ; C. Frevel, *Geschichte Israels*. 2. Auflage (2018) ; B. U. Schipper, *Geschichte Israels in der Antike* (2018). [B・U・シッパー『古代イスラエル史：「ミニマリズム論争」の後で最新の時代史』山我哲雄訳、教文館]

「祭司文書」(P 資料)と呼ばれるようになり、もう一つの「エロヒム」を用いる資料は、「エロヒスト」(E 資料)と呼ばれるようになった。他方で、「ヤハウエ (Jahweh)」の神名を用いる文脈でも、創世記や出エジプト記と、五書の最後の申命記とでは、思想的にも用語法的にも違いが大きいことが分かり、「ヤハウィスト」(J 資料)から申命記 (Deuteronomium) が独自の資料 (D 資料) として区別されるようになった。こうして、五書が J, E, D, P (想定上の時代順) の四資料を組み合わせたものだという四資料仮説が、19 世紀の終りから 20 世紀の初めにかけて、ヴェルハウゼン¹⁰などによって確立され、その後、ノートやフォン・ラート、ヴァイザー¹¹などによって発展させられた。なお、用語が「ヤハウエ」を「J」で表すなどドイツ語風なのは、資料仮説が主としてドイツで発展したことによる。

もちろん、四資料仮説に異論や修正意見がなかったわけではない。四つではなく、さらに多くの資料を抽出しようという試みも行われたし (アイスフェルト、フォーラー¹²)、量が少なく断片的なエロヒスト (E 資料) については、独立して存在していた「資料 (Quelle)」というよりも、既存の文脈への加筆、編集層ではない

¹⁰ J. Wellhausen, *Prolegomena zur Geschichte Israels*. (初版は 1883) ; ders., *Die Composition des Hexateuch und Historischen Bücher des Alten Testaments*. (初版は 1885).

¹¹ M. Noth, *Überlieferungsgeschichte des Pentateuch* (1948) [M・ノート『モーセ五書伝承史』山根哲雄訳、日本基督教団出版局] ; G. von Rad, *Das Formgeschichtliche Problem des Hexateuch* (1938) [G・フォン・ラート『旧約聖書の様式史的研究』荒井章三訳、日本基督教団出版局] ; A. Weiser, *Einleitung in das Alte Testament* (1957) [A・ヴァイザー『旧約聖書緒論』小野寺幸也、時田光彦訳、聖文舎]

¹² O. Eissfeldt, *Einleitung in das Alte Testament : unter Einschluß der Apokryphen und Pseudepigraphen sowie der apokryphen und pseudepigraphenartigen Qumrân-Schriften : Entstehungsgeschichte des Alten Testaments*. (31964) ; G. Fohrer, *Einleitung in das Alte Testament* (101965).

かという見解が示された（フォルツ／ルドルフ¹³）。同じ見方は、祭司文書（P 資料）についても唱えられた（クロス¹⁴）。しかし、少なくとも私が研究を始めた 1970 年代初めには、そのような見方が主流とは言えない状況であった。

ところが 70 年代の後半から 80 年代になると、かつては四資料仮説を認めていたレントルフやその弟子のブルームなどによって、資料仮説の根幹ともいえるべき「ヤハウィスト（J 資料）」の存在そのものに対する根本的な疑念が唱えられるようになった¹⁵。その論拠は複雑で多岐にわたるが、せんじ詰めれば、同じ「ヤハウエ」の神名を用いていても、創世記の文脈と出エジプト記や民数記の文脈では観念や思想の違いが大きく、同じ著者に帰することができない、というものであった。すなわち、族長時代から出エジプト、荒野放浪について物語る、長大な一続きの「ヤハウィスト」の文脈など存在しない、と言うのである。

レントルフやブルームの四資料仮説批判は、ヨーロッパで大きな反響を呼び、五書の各書について、四資料仮説によらない注解書や研究書が次々と出版された。また、五書の成立に関して、四資料資料仮説とは別のさまざまなモデルが提唱された（ロゼー、オットー、ツェンガー、ハンス・C・シュミット¹⁶）が、四資料仮説に代わり

¹³ P. Volz/W. Rudolph, *Der Elohst als Erzähler: ein Irrweg der Pentateuchkritik? : an der Genesis Erläutert.* (BZAW 63, 1933).

¹⁴ F. M. Cross, *Canaanite Myth and Hebrew Epic : Essays in the History of the Religion of Israel.* (1973). [F・M・クロス『カナン神話とヘブライ叙事詩』興石勇訳、日本基督教団出版局]。

¹⁵ R. Rendtorff, *Das überlieferungsgeschichtliche Problem des Pentateuch.* (BZAW 147, 1977) [R・レントルフ『モーセ五書の伝承史的問題』山我哲雄訳、教文館] ; E. Blum, *Die Komposition der Vätergeschichte* (WMANT 57, 1984); ders., *Studien zur Komposition der Pentateuch* (BZAW 189, 1990).

¹⁶ M. Rose, *Deuteronomist und Jahwist : Untersuchungen zu den Berührungspunkten beider Literaturwerke* (1981); E. Zenger, *Einleitung in das Alte Testament* (2004); E. Otto, *Das Deuteronomium im Pentateuch und Hexateuch : Studien zur*

学界で広くコンセンサスを得た定説が確立しているわけではない。基本的に四資料仮説を堅持しようとする研究者（ヴェルナー・H・シュミット、カイザー、キャンベル／オブライエン、フリードマン¹⁷⁾）も少なくないし、時代を捕囚時代やペルシア時代に下げて「ヤハウィスト」の存在を認める研究者もいる（ヴァン・シータース、レヴィン、並木浩一¹⁸⁾）。また、最近、アメリカの若手研究者（ベイデン、スタックアート¹⁹⁾）を中心に、新たな角度から四資料説を再評価する動きも出ている。五書研究はいまだに、さまざまな仮説の「もみ合い状態」あると言え、将来どのような方向に進むのか、予断を許さない。

預言書研究

預言書研究にも大きな変化があった。以前は、預言書はエレミヤ、エゼキエルなど、書名となっている預言者自身の思想と時代状況を伝えるものと素朴に信じられ、「預言者〇〇、その思想と時代」のような本が多く書かれた。しかし、預言者を考えるうえでの根本的な問題は、預言者の多くは靈感に駆られて即興的に「語る」人であ

literaturgeschichte von Pentateuch und Hexateuch im Lichte des Deuteronomiumrahmens (2000); H. C. Schmitt, *Redaktionsgeschichtliche Studien zum Pentateuch* (2021).

¹⁷⁾ W. H. Schmidt, *Einführung in das Alte Testament* (51995) [W・H・シュミット『旧約聖書入門 上』木幡藤子訳、教文館] ; O. Kaiser, *Grundriß der Eineitung in die kanonischen und deuterkanonischen Schriften des Alten Testaments. Band 1 : Die Erzählenden Werke* (1992); A. F. Campbell/M. A. O'Brien, *Sources of the Pentateuch: Texts, Interpretations Annotations* (1993); R. E. Friedman, *The Bible with Sources Revealed : A new View into the Five Books of Moses* (2005).

¹⁸⁾ J. van Seters, *Abraham in History and Tradition* (1975); C. Levin, *Der Jahwist* (FRLANT 157, 1993); 並木浩一『ヘブライズムの人間感覚』(1997)。

¹⁹⁾ J. S. Baden, *The Composition of the Pentateuch: Renewing the Documentary Hypothesis* (2012); J. Stackert, *Prophet Like Moses: Prophecy, Law, and Israelite Religion* (2014).

り、「書く」人ではなかったということである。誰が預言者の言葉を書き記し、書物にしたのか。イザヤには弟子たちがいたこと示唆されており、エレミヤにはバルクという書記が伴っていた。そのような書記や弟子たちが、預言者たちの言葉を忠実に書き残したのだということが、以前には当然のこととして前提とされていた。

しかし、そのような前提が、19 世紀末から 20 世紀にかけて、次々と覆されていったのである。最初に問題になったのが、最大の預言書であるイザヤ書である。イザヤは前 8 世紀の預言者で、アッシリアの侵攻の時代のエルサレムで活動したとされている。ところが、すでに 19 世紀末にドゥーム²⁰が、イザヤ書 40 章以下では 200 年近くも後の前 6 世紀のバビロン捕囚の状況が前提とされており、ユダヤ人を捕囚から解放するペルシア王キュロスの名（イザ 45:1）まで名指しされるので、この部分は前 8 世紀のイザヤの言葉ではありえず、捕囚時代の別の匿名の預言者の言葉であるとして、「第二イザヤ（Deutero-jesaja）」という観念を導入した。さらにイザヤ書 56-66 章については、イザヤ自身とも第二イザヤとも異なるとし、「第三イザヤ」とした。これ以降、イザヤ書のこの三区分は広く普及した。

20 世紀後半になって問題になった預言書の一つが、『エゼキエル書』である。1969 年にスイスの旧約学者ツィンマリは、千ページを超える二巻本のエゼキエル書注解を発表したが、そこでツィンマリ²¹は、現にあるエゼキエル書の言葉のかなりの部分—量的に半分近く—はエゼキエル自身のものではなく、エゼキエルの言葉を伝承した学派（Schüler）によって発展的に「書き進め」られたものであるとし、このようなテキストの拡大過程を「Fortschreibung」と呼んだ。その後、ドイツ語圏で広く用いられるようになる用語であるが、やや訳しにくい。文字通りには「書き進め」であるが、原著

²⁰ B. Duhm, *Das Buch Jesaja* (1892).

²¹ W. Zimmerli, *Ezechiel* (BK 13, 2Bde., 1969).

者とは別の人間によって「書き加えられる」ことを意味する。従来は「加筆 (Zusatz)」とか「拡張 (Erweiterung)」と呼ばれた経過であるが、そのように呼ぶと、本来の部分ではないもの、「二次的」で価値の劣ったものという消極的、否定的なニュアンスを帯びやすい。これを「Fortschreibung」と呼び変えたことには、このようなテキストの成長を、創造的な発展過程としてより積極的、肯定的に理解しようという意図がある。いずれにせよ、これにより、預言書の内容が必ずしも書名になっている預言者自身の思想とは限らないことが広く認知されるようになった。

このようなテキストの拡張、発展経過は、『編集 (Redaktion)』とも呼ばれる。編集者が手を加えていくという意味である。この点については、特にエレミヤ書が注目された。エレミヤ書には、主としてエレミヤが神の言葉を引用したり、自分の嘆きを語る韻文の部分と並んで、エレミヤの活動について三人称で客観的に描写する散文の部分がある。後者はエレミヤの書記バルクの手によるものとされていた。同時にこの散文の部分には、五書の申命記にある用語法に似たものがよく見られることが指摘されていたが、時代の共通性から説明されることが多かった。申命記が書かれたのも、エレミヤが活動したのも、王国時代末期のヨシア王の時代から捕囚時代の初めにかけてのエルサレムであったからである。これに対し、ドイツの旧約学者ティール²²は、1973 年と 1981 年に発表した研究で、エレミヤ書には散文の部分を中心に、組織的な申命記的編集が加えられていることを論証し、その編集部分がエレミヤ自身の思想とかなり異なるものであることを示した。この見方はその後のエレミヤ研究のあり方を強く規定することになったが、エレミヤの思想をめぐって新たな論争をも産んだ。例えば、それまでしばしばエレミヤの思想の絶頂とも見なされてきた「新しい契約」の預言 (エレ 31:31-

²² W. Thiel, *Die deuteronomistische Redaktion von Jeremia 1-25* (WMANT 41, 1973); Ders., *Die deuteronomistische Redaktion von Jeremia 26-45* (WMANT 52, 1981).

34) は散文であり、しかもエレミヤ的でなく申命記的であるとされたからである。

日本の小田島太郎²³は、ドイツで出版された学位論文で、ティールの研究を踏まえつつも、エレミヤ書においては、ティールの指摘する申命記的な編集以前に、救済預言を中心に申命記的編集とは別の編集が加えられていることを示した。このように、エレミヤの真正な言葉は時と共にますます縮減されていった。

これに対し、英国の旧約学者マッケン²⁴は、2 巻本のエレミヤ書注解において、ティールの言う申命記的編集や小田島の言う前申命記的編集以外にも、様々で多様な編集層があると指摘し、エレミヤ書の成立について「雪だるま仮説 (rolling-corpus-hypothesis)」を提唱した。小さな雪の球を雪上で転がすと、転がす度に新しい層が加えられて球がどんどん大きくなるように、最初は少数であった預言者の言葉に、異なる編集者により無数の編集の手が加えられて最終的に今ある預言書が帰結した、というのである。この「雪だるま」理論は、後に他の預言書や五書の成立の説明にも応用されるようになった。

先にドゥーム以来の「第二イザヤ」、「第三イザヤ」の区別について述べたが、20 世紀後半になると、残された「第一イザヤ」(イザ 1-39 章) についても、預言者自身に由来しない言葉の存在が指摘されるようになった。第一イザヤの部分でも、極度に終末論的性格を持ったいわゆる「イザヤの黙示録」(イザ 23-27 章) の部分などは、かなり遅い時代の付加であることが以前から指摘されていたが、イザヤ書の編集史的研究に大きな一石を投じたのは、1977 年に発表されたヘルマン・バルト (カール・バルトとの関係はないらしい)

²³ T. Odashima, *Heilsworte im Jeremiabuch. Untersuchungen zu ihrer vordeuteronomistischen Bearbeitung* (BWANT 125, 1988).

²⁴ W. McKane, *Jeremiah Vol.I, Introduction and Commentary on Jeremiah 1-XXV* (ICC, 1986); *Jeremiah Vol.II, Commentary on Jeremiah XXVI-LII* (ICC, 1996).

の学位論文²⁵であった。バルトによれば、第一イザヤ中、アッシリアの滅びとシオンの救済を約束する一連のテキストは、イザヤ自身よりの百年近く後のヨシヤ王時代の付加であるという。それはエルサレムがアッシリアの支配を脱した時代であった。バルトの見方は、その後出たいくつものイザヤ書注解に様々な形で応用された。

より学界に衝撃を与えたのは、オットー・カイザーによる ATD のイザヤ書注解の「書き直し」事件である。周知のように、Das Alte Testament Deutsch (略号 ATD) は、ドイツ語圏を代表する歴史的批判的注解書シリーズである。イザヤ書を担当したカイザーは、1960 年に出た 1-12 章の注解の初版「*Der Prophet Jesaja : Kapitel 1-12*」²⁶では、この部分の多くをイザヤ自身の言葉とし、前 8 世紀におけるアッシリアのユダ侵攻時の歴史的状況を背景として理解する、伝統的な見解がとられていた。ところがその後、13-39 章を注解する作業を続けるうち、カイザーは、前 8 世紀のイザヤ自身に帰せるテキストが極めて少ないと考えるようになった。逆に言えば、極めて多くの部分が後代に加えられた付加であって、その付加は時代的には捕囚後のペルシア時代やヘレニズム時代にまで及ぶ、という。このような新しい見方に立った 13-39 章についての注解は、1973 年に「*Der Prophet Jesaja : Kapitel 13-39*」²⁷として出版された。その後カイザーは、イザヤ書の大部分を後代のものとする新しい見方から、1-12 章の注解を全面的に書き直し、1981 年(5 版)に「*Das Buch des Propheten Jesaja : Kapitel 1-12*」²⁸として出版した。書名が「預言者イザヤ」から「預言者イザヤの書」に改められていることに注意を喚起したい。すなわち、現にある書物としての『イザヤ書』については語りうるが、歴史上の預言者本人についてはもはやほと

²⁵ H. Barth, *Die Jesajawort in der Josiazeit. Israel und Assur als Thema einer produktiven Neuinterpretation der Jesajaüberlieferung* (WMANT 48, 1977).

²⁶ O. Kaiser, *Der Prophet Jesaja : Kapitel 1-12* (ATD 17, 1960).

²⁷ O. Kaiser, *Der Prophet Jesaja : Kapitel 13-39* (ATD 18, 1973).

²⁸ O. Kaiser, *Das Buch des Propheten Jesaja : Kapitel 1-12* (ATD 17, 1981).

んど語りえない、ということなのであろう。なお、ATD は日本語訳²⁹も出ているが、日本語版の原本となっているのは1978年の版で、これは旧版通りなので、注意を要する。

このようなカイザーの新しい見方は、もちろん、様々な議論を引き起すことになった。この見方によれば、『イザヤ書』全体がほとんど「偽書」ということになってしまい、場合によっては「第二イザヤ」の方が「第一イザヤ」よりも古い、ということになりかねないからである。イザヤ書と言えばメシア預言（イザ9:5-8; 11:1-16章）が有名であるが、これもイザヤのものではない、ということになる。

このような預言書についての編集史的方法は、大預言者だけではなく、アモスやホセアなどのいわゆる「12 小預言者」の書にも応用されつつある。新しい注解書や研究書が出版される度に、預言者自身の真正な言葉がどんどん切り詰められるという傾向が続いているのである。

以上、駆け足であるが、旧約研究における、私が経験してきた50年ほどの研究動向の変遷について、特にイスラエル史、モーセ五書、預言書を中心に紹介してきた。ここに取り上げてきたのは比較的急進的な立場であり、どの分野においても、従来の見方を維持、ないし一部修正して継承しようとするより穏健な立場も存在している。したがって、論争が続いているが、時とともにますます対立が激しくなり、物の見方の幅が大きくなりすぎて、学問的対話が成り立たないということもしばしばである。冒頭で、「定説不在の混沌状態」と言ったことの意味が、少しはお判りいただけたのではないかと思っている。詩編研究については、私はあまり詳しくないが、私の扱った領域ほどは研究状況が混乱していないのであろうか。山吉智久氏に解説いただきたい。

²⁹ O・カイザー『イザヤ書 1-12 章』（三浦永光・三浦康子訳、ATD・NTD 聖書註解刊行会）。